



少年院出院者の立ち直りを探る

―職親企業に就労した少年院出院者とその支援者等へのインタビュー調査から―

矯正局更生支援管理官付事務官（前矯正研修所効果検証センター効果検証官補）

矯正研修所効果検証センター効果検証官補

矯正研修所効果検証センター統括効果検証官

九^くの^の里^り 真^ま緒^お
北^{きた}原^{はら} 安^あ佳^か理^り
佐^さ々^さ木^き 彩^{あや}子^こ

一 はじめに

第二次再犯防止推進計画（令和五年三月閣議決定）において、「社会復帰を果たした者等が犯罪や非行から離脱することができた要因」を踏まえて、再犯の防止等に関する施策の一層の推進を図ることが新たに盛り込まれた。矯正施設で働く職員は、犯罪者や非行少年が再犯・再非行をして矯正施設に再入所する姿を目にする機会は多くある一方で、社会で立ち直っていく姿を見る経験は

乏しい場合が多く、それゆえ、犯罪や非行から離脱して社会復帰する過程を想像することはたやすいことではない。他方、犯罪者や非行少年の処遇に当たる矯正職員が再犯・再非行に至る要因だけでなく、立ち直りの過程に目を向けることは、被収容者の矯正施設出所後について現実的な見通しを持って処遇に当たり、また、施設内外において必要とされている支援を検討する上で重要であると考えられる。

少年院を出院した非行少年の少年院への再入院・刑事

施設入所率を見ると、出院後二年以内が最も急激に上昇し、その後緩やかに上昇している(犯罪白書、二〇二四)。特に出院後間もない期間は再非行につながる誘因や困難が多い時期であり、少年院出院者の立ち直りを目指す上で、最も重要な時期であると考えられる。ただし、少年院出院後の時期にどのような困難や葛藤が生じているのか、また、どのような環境や周囲からの働き掛けが立ち直りを支えているのかについては、十分に解明されていない部分も多い。特に、出院後の円滑な社会復帰において就労が及ぼす影響は大きい^①が、仕事が決まってもすぐにやめてしまう者も少なくなく、就労生活の安定に至るまでの過程やそれを支える環境等について探ることの意義は大きい。

以上を踏まえ、矯正研修所効果検証センターでは、少年院出院後間もない時期を含めた、立ち直りの過程での葛藤や困難、また、安定した就労生活の構築等に必要とされる支援を明らかにすることを目的とした調査を今般、実施した。当事者の主観的な認識だけでなく、客観的視点も取り入れることで、少年院出院者の立ち直りを多角的に捉えることを目指し、職親プロジェクト^②の参加

企業(以下「職親企業」という。)に依頼し、従業員である出院者と、彼らを雇い、又は共に働き、そばで立ち直りの過程を見守る雇用主等(以下「支援者」という。)の両者を調査対象とすることとした。本稿では、その結果等について報告する^③。

二 調査概要

調査対象者は、少年院出院後職親企業に勤めている者(以下「当事者」という。)三名及びその上司等の支援者二名であり、各人に対し、九〇分程度のインタビュー調査を行った。当事者三名は全員二〇代男性で、出院後間もなく職親企業で働き始め、調査時点で就労開始から一〇か月から一〇年が経過していた。また、就職後しばらくの期間は、当事者全員が社員寮等の職親企業が管理する住居に暮らしていた。

調査内容は、当事者については、少年院在院中から現在までの生活において苦労や困難があった出来事、反対に良かった出来事、支援者については、支援する上での困難や支援者から見た出院者のつまずきや変化を中心とした。分析に当たっては、録音データを逐語化した上で、当

事者と支援者の別に、佐藤(二〇〇八)の質的分析の手法に従って、定性的コードを振って部分に切り分ける「セグメント化(脱文脈化)」、類似のものを集める「データベース化(第二段階の再文脈化)」及び論点をまとめて示す「ストーリー化(第二段階の再文脈化)」の手続を踏んだ。

なお、海外では人が犯罪や非行から立ち直る過程で何が生じているのかに着目した学術研究が数多く蓄積されているところ、Graham & McNeill (2017) は、立ち直りを説明する理論を以下の四つに整理している。

▼身体的・心理的成熟 (maturation) : 加齢による変化が離脱を促すとする理論

▼社会的役割・社会的絆 (social roles/social bonds) : 社会的役割や社会的絆の変化が離脱を促すとする理論

▼アイデンティティ (identity) : 親としての自己認識を持つなどアイデンティティの変化が離脱に重要であるとする理論

▼ルーティーン (routine activities) : 仕事や家族、宗教コミュニティなどにおける日常活動が離脱に係るものとする理論

今回のインタビュー結果は、上記四つの領域を基軸と

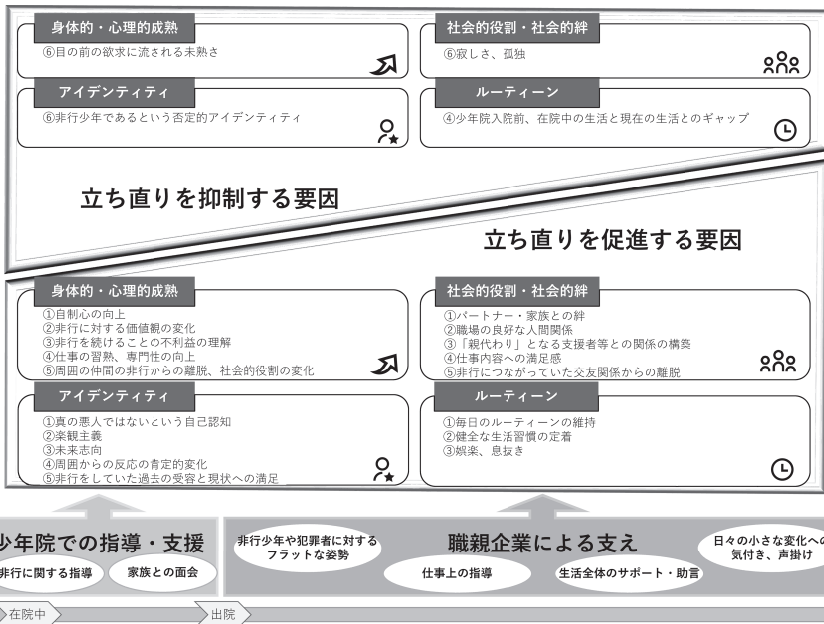


図 本調査から示唆される少年院出院者の立ち直りの過程

し、立ち直りを促進する要因と抑制する要因に着目しながら整理した(図参照)。

三 当事者へのインタビュー調査から

分析の結果、「身体的・心理的成熟」、「社会的役割・社会的絆」及び「アイデンティティ」についてはそれぞれ六コード、「ルーティーン」については四コード抽出された。以下、領域ごとにまとめた結果を具体的な語りとともに示す。

(一) 身体的・心理的成熟

立ち直りを促進する要因として、五コードが抽出された。

①自制心の向上は、その場の楽しさだけでなく、先の見通しを持って冷静に判断できるようになる等である。②非行に対する価値観の変化は、少年院教育を経て犯罪や非行が格好良いものだと思わなくなる等である。③非行を続けることの不利益の理解は、少年院を経験してもなお、犯罪や非行をして矯正施設に収容されることは割に合わないと感じるようになる等である。これらは、少年

院入院前の自身と比較して語られたり、少年院生活を経験して生じた変化として語られたりすることが多かった。

④仕事の習熟、専門性の向上は、仕事に関する資格を習得する、仕事に慣れてできることが増える等である。⑤周囲の仲間からの離脱、社会的役割の変化は、本人自身の成熟ではないが、少年院入院前に一緒になって非行をしていた仲間が就職や結婚を機に、犯罪や非行から離れていく等である。周囲の者の成熟は、当事者本人が犯罪や非行に関わる機会を減少させるとともに、健全な生活を送る同世代のロールモデルを持つことにもつながっていた。

具体的には、③非行を続けることの不利益の理解について、以下のように語られた。

「悪いこととして捕まんない人ってほんと頭いい人だけ、ほんとごく一部だけだと思ってるんで、大体みんなバカだから大体ボロが出てすぐパクラれちゃうんで、悪さしてお金稼いで、でいい暮らししても、まあ捕まったら、もうそのお金意味ないじゃないですか。それってなんか無駄かって気がして。」

反対に、立ち直りを抑制する要因として、一コードが

抽出された。

⑥目の前の欲求に流される未熟さは、少年院出院後の新たな生活に苦勞し、不良者との付き合いを再開させた、再び犯罪に手を出したい、仕事を休みたいなどといったものを含む。

具体的には、以下のように語られた。

「出院して最初の頃は、その規則正しい生活ってというのがずっと続けられてたんですけど、やっぱりその慣れ始めてくると、まあ夜更かしだったりとか、遊んだりして、やっぱり仕事に迷惑かけちゃったりとか、現場に行けなく遅刻しちやったりとかってというのがあったから。」

(二) 社会的役割・社会的絆

立ち直りが促進される要因として、五コードが抽出された。

①パートナー・家族との絆は、親、配偶者、子供等の家族との時間が大切だと思おうようになり、その存在が日々の生活を継続する支えになる等である。②職場の良好な人間関係は、コミュニケーションが取りやすいなど同僚との良好な関係性である。③「親代わり」となる支

援者等との関係の構築は、職場の上司や保護司など指導的な関わりも得られる関係性を築く等である。④仕事内容への満足感は、仕事に充実感や達成感がある等である。

⑤非行につながっていた交友関係からの離脱は、上述したような絆を構築、維持していくための行動として、出院後に地元から離れる、不良者との連絡手段を断つ等である。これらのきつかけとして、少年院における家族面会で親の思いに気付き、非行をして家族を悲しませることはもうしたくないなどと考えたことが挙げられていた。

具体的には、①パートナー・家族との絆について以下のように語られた。

「出院後はこうなっているんですか？（家族を）笑わしてやりたいなっていう気持ち強かったんで、親父と母親やっぱ笑ってた方がいいじゃないですか。（中略）だから誕生日会とか絶対やるようにしたし。（中略）まあ笑いも増えるし。笑いが増えたらやっぱり。いいのかなと思って。親孝行なんじゃないかなと思って。そう、結婚してからはそういうふうにして。子供が生まれてからも。」

反対に、立ち直りを抑制する要因として、一コードが抽出された。

⑥寂しき、孤独は、少年院出院後に生活環境を変えたことで、以前親しく交流していた不良者を含む仲間と離別して孤独感を覚える等である。

具体的には、以下のように語られた。

「少年院を出院して）やっぱ寂しかったという。ちょっと孤独というか、そういうのがあって、やっぱり（少年院入院前に）仲良かった友達とやっぱいるともちろん楽しいっていうのもあったし。」

(三) アイデンティティ

立ち直りを促進する要因として、五コードが抽出された。

①真の悪人ではないという自己認知は、自分は「根から悪い人ではない」などという認識である。②樂觀主義は、否定的感情を引きずらず、きつとうまくいくとポジティブに捉える等である。③未来志向は、未来を重視し、進学したい、独立して会社を持ちたいなどとこれからやりたいことや目標を持つ等である。④周囲からの反応の肯定的変化は、出院後、しばらく時が経過して、就労を中心とした日常生活が軌道に乗ってから、他者から仕事

ぶりを評価されたり、非行少年として見られる機会が減少していったりする等である。⑤非行をしていた過去の受容と現状への満足は、非行をして少年院に入院していた過去を一つの経験として受け止め、現在の「普通」の生活の良さを知る等である。

具体的には、③未来志向について、以下のように語られた。

「少しでも良い方向に行きたいなと思ってて、特にやりたいことはないんですけど、高校っていうか、四年、三年とか行ったら、色んな授業を受けたりとか、いろんな人とのつながりも増えれば、また何かやりたいことが見つかるんじゃないのかなと思って。そういうところには悪い人もいないし。」

反対に、立ち直りを抑制する要因として、一コードが抽出された。

⑥非行少年であるという否定的アイデンティティは、自分も含めた非行や犯罪をする人間は、「普通」の人になることは難しく、他人からは、怖がられたり、落ちこぼれとして見られたりしているに違いないというものである。

具体的には、以下のように語られた。

〃その普通の真面目な人と、そこでなんか比べちゃうと、なんかああ、やっぱり自分はダメなのかなと思っちゃたりするんですよ。(中略) こういうふうになりたいとは違うんですけど、やっぱりそういう人を妬む気持ちを持つたりするときもあるんですよ。なんで(昔は)同じぐらいだったけど、この人のほうがよくなってるんだらうとか。〃

ただし、非行少年というアイデンティティから脱却したいとの思いやまだ受刑には至っていないとの思いが、変化への動機付けとなり得る可能性を示唆する語りも得られた。

(四) ルーティーン

立ち直りを促進する要因として、三コードが抽出された。

- ① 毎日のルーティーンの維持は、仕事を中心に、毎日決まったやるべきことがある等である。
- ② 健全な生活習慣の定着は、規則正しい生活習慣が身に付く等である。
- ③ 娯楽、息抜きは、趣味や遊びなどでストレス発散をする等である。

具体的には、①毎日のルーティーンの維持について下のように語られた。

〃(寮生活で)起きてすぐ仕事行けてね、朝起こしてくれるし、帰ってきたら飯もあるし、お風呂もある。準備されてるし。〃

反対に、立ち直りを抑制する要因として、一コードが抽出された。

④ 少年院入院前、在院中の生活と現在の生活とのギャップは、少年院入院前や在院中とは全く異なる環境での生活が始まることに加えて、初めて親元を離れて自分で仕事をして生計を立てることの困難さ等である。

具体的には、以下のように語られた。

〃ルーティーンってというのがやっぱり少年院と全然違うわけで、起きる時間だったり、そのいろんな人の人間っていか人と話したりして仕事するっていうコミュニケーションの取り合ったりっていうのもあんまりしてきたことがなかったから、そういう面に関してやっぱり最初の頃は慣れるまでもきつかったですね。どうしても。〃

四 支援者へのインタビュー調査から

支援者へのインタビュー調査から明らかになったのは、矯正施設を出た者の社会復帰上の課題やそれを踏まえた上での、手厚い支援や関わりの必要性であった。

(一) 矯正施設を出た者の社会復帰上の課題

出所者や出院者の中には金銭管理に失敗をして借金がかさんだり、仕事に支障を来すほどの生活リズムの乱れ、対人トラブルが生じるなど問題が山積みとなって失踪したり、話の通じなさや私の強さが目立ったりするケースもあることが語られた。特に出院者を含めた若年者では、注意されるとやる気をなくしてしまったり、部屋の整理整頓や時間管理ができないなど基本的な生活習慣が身に付いていなかったりと就労以外の問題が多く生じることが語られた。また、薬物や性犯罪など罪種によっては、就労生活が順調に見えても、同時に再犯・再非行にも及んでいたケースが多く、支援の難しさを感じていることも語られた。

(二) 矯正施設を出た者に対する支援や関わりの姿勢

まず、出所者や出院者について、犯罪や非行をした過

去はそれとして受け入れ、現在やこれからの本人の態度を重視するフラットな姿勢を持ち、能力や性格など相手に合わせた説明をする、日々のちよつとした表情の変化に敏感に気付いて相談に乗ったりねぎらったりするという関わりの工夫が見いだされた。また上述したような、仕事以外の問題に対応し、金銭管理に関するサポートや、当事者のおまじきや悩みに応じて友人や家族との関係についても助言をするなど、生活全体のサポートをするこ

とで、当事者の就労を中心とした社会生活の継続につなげていることが示唆された。

具体的には、以下のように語られた。

「自分は毎朝接してるので、まあ声をかけることもできるし、嘘でも褒めてあげることもできるじゃないですか。ちよつとしたこと、耳にすればね。(中略)そういうのだけでもね。まあ、できるだけ言えるように。」

(三) 立ち直りに対する明るい見通し

支援者の手厚い支援や関わりの背景には、指がない、入れ墨が入っているなどの外見的特徴もあって、多くの会社から採用を拒否されるような出所者・出院者を

受け入れることで自身の会社が社会の「受け皿」の役割を果たしているとの自負があった。加えて、出所者・出院者が一生懸命働いて徐々に成長していく姿を見たり、長期間にわたって就労を継続して会社の「財産」となっていく姿を目にしたりしてきたことによる出所者・出院者の今後への明るい見通しがあることも支援の原動力となっていたことが示唆された。

具体的には、以下のように語られた。

〆週五、週六頑張って働きますし、寝坊も多かったやつが今、寝坊も一切しないんで。だからそういう成長を見るとやっぱり自分もうれしいですし現場でその子の名前が出てよく頑張ってるよとかそういうクレームじゃなくていい話を聞くと、あ、今までのこう疲れとか頑張ってきたのが良かったなみたいのはあります。

五 考察

非行や犯罪から立ち直る過程で、重要な要素となる「身体的・心理的成熟」、「社会的役割・社会的絆」、「アイデンティティ」及び「ルーティーン」の四つの領域を基軸に分類して分析した結果、先出の図に示したようにそれ

ぞれの領域において、立ち直りを促進する要因と抑制する要因が見いだされた。少年院出院後間もない時期には、抑制する要因についての語りが比較的多い一方、時間がたつに従って、促進する要因についての語りが多くなっていた。また、促進する要因と抑制する要因が拮抗する中で、支援者に支えられながら、立ち直りを促進する要因が徐々に拡大して就労生活が安定し、社会生活が軌道に乗っていくプロセスが見て取れた。そうしたプロセスの中で、失敗したり乗り越えたりすることは、社会生活を安定的に継続するために必要な力を養うという点で、立ち直りの過程において欠かせないものであると考えられた。

特に、少年院出院者は一〇代後半から二〇歳頃の心身の発達が著しく、一般に社会的自立を果たしていく時期でもあって、立ち直りの契機となるような就職、結婚などのライフイベントを含む他者との出会いをつかみやすいものと考えられる。こうしたことから、「身体的・心理的成熟」及び「社会的役割・社会的絆」の変化が立ち直りに与える影響は非常に大きいものと思われる。一方、裏を返せば未熟さが残り、初めて仕事をしたり一人で生

活をしたりすること自体にも困難が生じやすいものと推察される。それゆえに出院後すぐの生活を包括的に支援することが重要であり、この点において、就労継続を支える生活力や対人スキルの不足に対する支援を行う職親企業のような支援者の果たす役割は大きい。

立ち直りに向かう当事者は、非行少年であるとの否定的アイデンティティと、自分は非行・犯罪から離れることができない、明るい未来が待っているはずだとの未来展望のどちらも持ち合わせていた。そして、職場や家庭において、新たな役割や他者との関係性を得ていく中で、時間を掛けて新たな肯定的「アイデンティティ」へと変容を遂げている姿が見て取れた。そして、この肯定的「アイデンティティ」は、過去の否定や逃避ではなく、過去を自己の一部として受容し、現状への満足と希望があったり成り立つものであった。

就労等を中心とする毎日の決まった日課である「ルーティーン」があることも、立ち直りの土台として重要な要因であることが明らかとなった。この点については、当事者以上に支援者の方が問題意識を持っており、就労経験やスキルの乏しい出院者が就労を定着させるために

は周囲の支援が重要な役割を果たしていることが示唆された。具体的には、出院者であることを理解した上でフラットな姿勢で向き合い、小さな変化に気付いて声を掛けるなど、就労を継続するための動機付けを含めた仕事上のサポートだけでなく、生活面でのサポートも行われていることが、就労の安定につながっていると推察された。職親企業のように、出所者や出院者を雇用した経験がある企業だからこそ、このような手厚いサポートを行うことができると考えられる。一方、薬物など特定の罪種については、就労を含めた社会生活が順調であるように見えても、再犯・再非行をしていることがあるという難しさが支援者から語られた。薬物使用などの問題を抱える当事者は、職親企業等での支援に加えて、医療分野等の専門的介入も求められると言えるだろう。

なお、立ち直りを促進する要因・抑制する要因はいずれも、少年院在院中からの連続性があることが推察された。例えば、少年院での家族との面会でのやりとりによって家族が立ち直りを支える関係性として機能するようになったり、少年院での非行に関する指導や出院後の生活設計の検討が、実際に出院後の生活で生かされたりした

ことが語られた。このように当事者の変化は在院中から連続して起こっているものであり、支援のアプローチは一部共通していたものの、支援者からは、当事者の少年院生活等の情報を得ることはほとんどできないという声も聞かれた。在院中から社会復帰後に掛けてシームレスな支援が可能となるよう、少年院と職親企業等との連携を強化することが更なる立ち直りの推進力となることが考えられた。

六 おわりに

本調査においては、調査協力者の人数が少ないほか、職親企業で勤務している者を対象としたため、出院後の環境が他の多くの出院者と異なるなど、本調査の結果を単純に出院者全体に般化して理解することはできない点に留意する必要がある。とはいえ、矯正職員が日頃出会う機会の少ない、少年院出院後に社会生活を継続させている者及びその周囲の支援者を対象として調査を実施したことで、出院者が立ち直りの過程で経験する葛藤や困難、必要となるサポートについて、示唆を得ることができた。矯正施設を出た後の者について調査協力を得るこ

とや、矯正職員が調査を実施することの難しさはあるが、今後も、矯正施設を出た後の立ち直りの過程への着目を続けていきたい。

最後に、今回の調査に御協力いただいた方々、矯正局の皆様にご心より感謝申し上げます。

(1) 職親プロジェクトとは、日本財団と企業が連携し、少年院出院者や刑務所出所者の更生・社会復帰を就労・教育・住居・仲間作りの面から包括的に支えることで、「誰でもやり直しができる社会」の実現を目指す民間発意の取組である。

(2) 当事者への調査については、分析の途中経過をICPA（国際矯正・刑務所協会）二〇二四年次総会にて発表したことを、刑政一三六巻二号にて簡単に報告している。

【引用文献】

- Graham, H., & McNeill, F. (2017). 'Desistance: Envisioning Futures', (pages 433-451) in Carlen, P. & Ayres Franca, L. (eds.) *Alternative Criminologies*. London: Routledge.
- 佐藤郁哉 (二〇〇八) 質的データ分析法 新曜社
- 法務総合研究所編 (二〇二四) 令和六年版犯罪白書